日本現代文學全集 62

豐島與志雄
岸田國士集
芹澤光治良

講談社

日本現代文學全集
62
豐島與志雄・岸田國士・芹澤光治良集

編集
伊藤　整
龜井勝一郎
中村光夫
平野　謙
山本健吉

初版　第1刷
昭和41年11月19日
増補改訂版　第1刷
昭和55年5月26日

42662

著者　豐島與志雄
岸田國士
芹澤光治良

裝幀　蟹江征治

發行者　野間省一

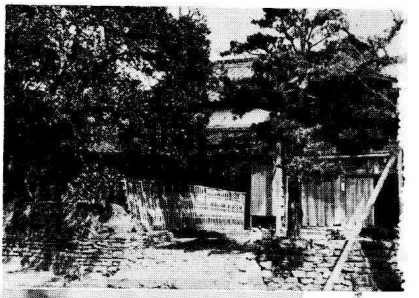
發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽2-12-21
郵便番號　112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振替東京 8-3930

印刷　豐國印刷株式會社
製本　株式會社國寶社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

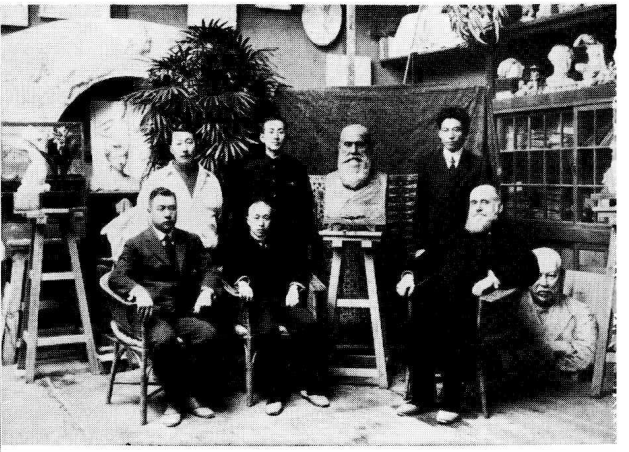
0395-106622-2253 (1)　(文1)

←昭和二十四年　文京區根津權現にて　豐島與志雄



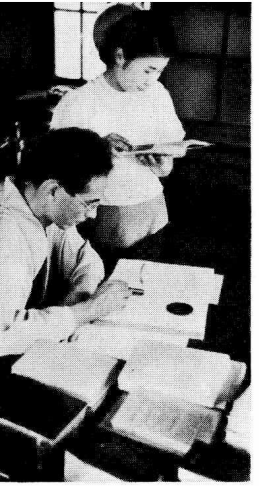
↑福岡縣朝倉郡福田村（現在　甘木市福田町）の豐島與志雄の生家

←明治四十二、三年頃　第一高等學校在學中



↑大正十、十一年頃
東京帝國大學教授エミール・エックの彫像完成の日に　武石弘一郎のアトリエにて　前列右から　エミール・エック　池田立基　後藤末雄　後列右から　與志雄　木村太郎　武石弘一郎

←大正十四年　本郷千駄木町の自宅にて
右から　妻　芳子
長男　澂　與志雄
次女　文子　長女　邦子

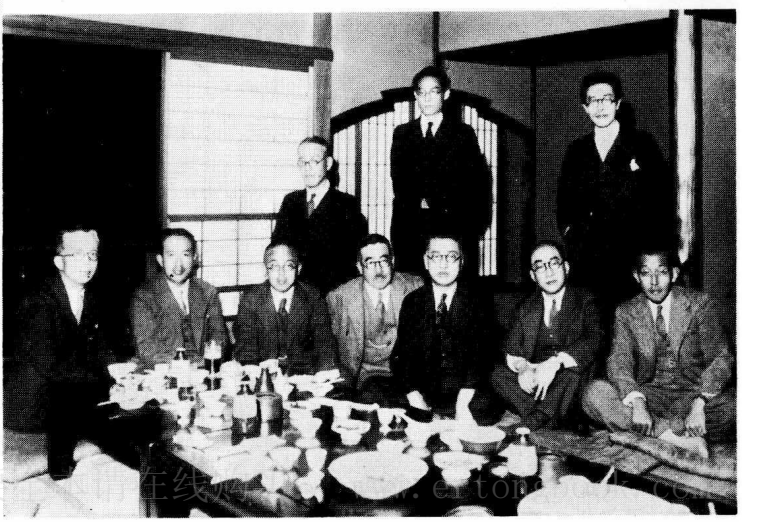


←昭和十二年頃　長女　邦子と

→昭和十一年三月　東京帝國大學文學部講師の頃　前列右から　平岡昇　與志雄　辰野隆　鈴木信太郎　渡邊一夫　中島健藏　後列右から一人おいて　佐藤文樹　鈴木力衛　二人おいて　朝倉季雄　二人おいて　小林正　一人おいて　小場瀬卓三

→昭和十五年　明治大學文藝科教授時代　前列右から　菅藤高德　今日出海　小熊虎之助　山田肇　與志雄　岸田國士　吉田甲子太郎　小林秀雄　田邊尚雄　吉野源三郎　三列目左から一人おいて　齋藤正直　右上の圓内　舟橋聖一　左上　阿部知二

←昭和十七年三月二十四日　臺北鐵道ホテルにて　右から一人おいて　佐多稻子　與志雄



→昭和十五年四月　偕樂園にて　前列右から　團伊能　加藤成之　久能木愼治　辰野隆　鈴木信太郎　尼子富士郎　西園寺實　後列右から　岸田國士　與志雄　石川欣一

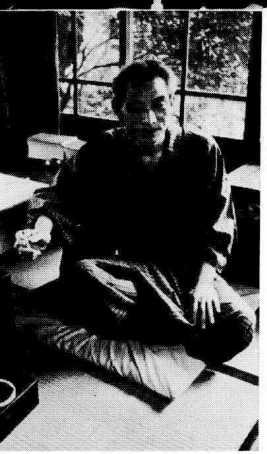
阅读结束，需要全文请在线购买：www.ertongbook.com

↑昭和十八年秋　上海旅行の際　阿部知二と

←昭和十九年　蘇州虎邱山にて　前列右から一人おいて與志雄　谷川徹三　加藤武雄

→昭和二十三年「火の會」席上　前列右から　草野心平　長男澂　一人おいて佐藤美子　佐藤敬　中島健藏　與志雄　その後荻須高德　高見順　その後　海老原光義

↓昭和二十五年　岸田國士還暦祝いの席上　右から　岸田國士　與志雄　青野季



←昭和二十八、九年

→昭和二十七年十一月　神西清の文部大臣賞受賞祝賀會席上　向う側右から　鈴木信太郎　川端康成　神西清　一人おいて　眞船豐　久保田万太郎　與志雄

→昭和十四年　岸田國士

↑大正六年頃　東京帝國大學文學部在學中　右から　太宰施門　國士

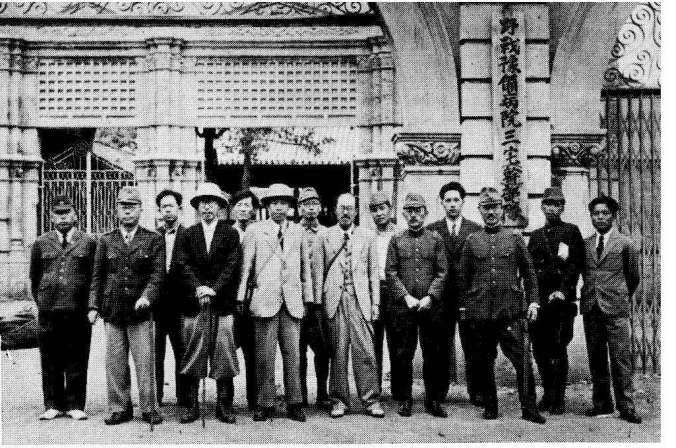
←大正九年頃　フランス留學時代　チロルの古城にて

→昭和九年　明治大學文藝科卒業記念寫眞　前列右から　岩田豐雄　三宅周太郎　吉田甲子太郎　長與善郎　里見弴　山本有三　國士　豐島與志雄　板垣鷹穂　小林秀雄　横光利一

←昭和十三年九月十二日　右から　次女　今日子　長女　衿子　國士　妻　秋子

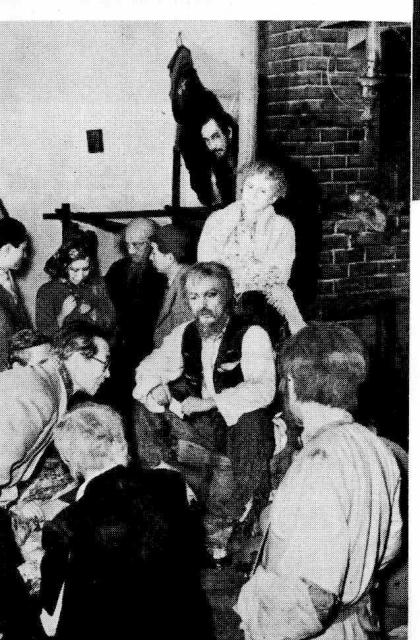
↑昭和二十一年　疎開先の長野縣飯田市外鼎村の家にて　前左　長女　衿子　後右から次女　今日子　國士　郡川春子

←昭和二十三、四年頃　臺東區谷中初音町の家にて



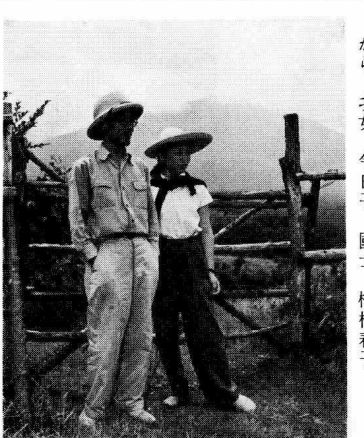
↑昭和十三年秋　中支從軍の際　右から　中谷孝雄　富澤有爲男　一人おいて　丹羽文雄　一人おいて　尾崎士郎　久米正雄　瀧井孝作　白井喬二　片岡鐵兵　國士　川口松太郎　佐藤惣之助

↑昭和二十五年十一月二十二日　上野　精養軒での還暦祝いの席上　左側の卓向う側右から　次女　今日子　國士　杉村春子



←昭和二十九年三月三日　「どん底」舞臺稽古最後の寫眞　前左端　國士　奥左から　穴澤喜美男　賀原夏子　北見治一　北川勇　中央前から芥川比呂志　荒木道子　三津田健

（撮影　田沼武能）

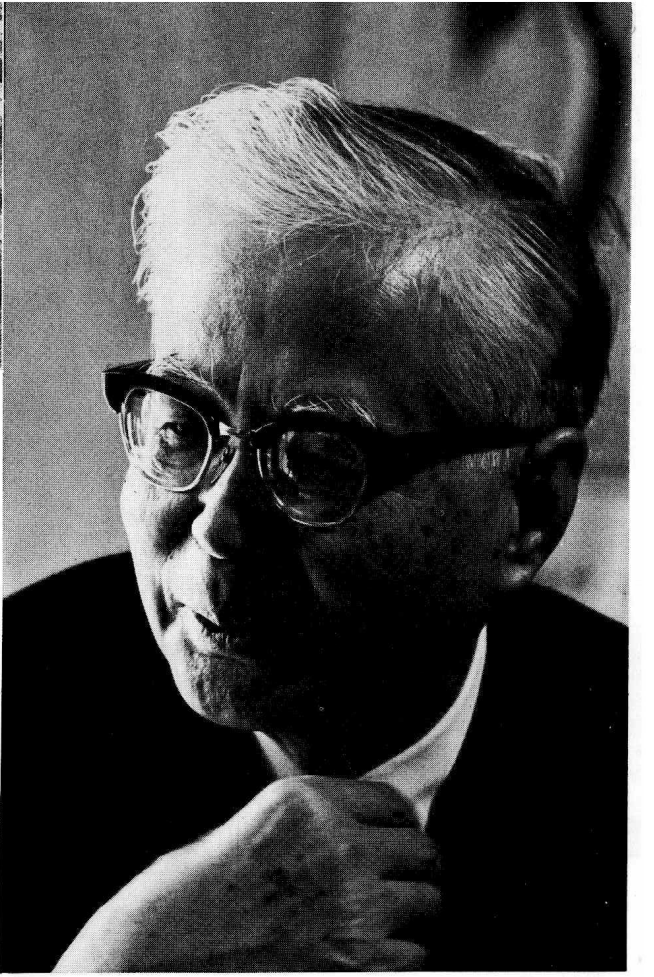


→昭和二十七年　北輕井澤　淺間牧場にて　次女今日子と

→昭和四十一年九月二十九日　中野區小瀧町の自宅にて　芹澤光治良

↑大正七、八年頃　第一高等學校三年の春　西寮二十番佛法同窓生と　後列右から二人目　光治良

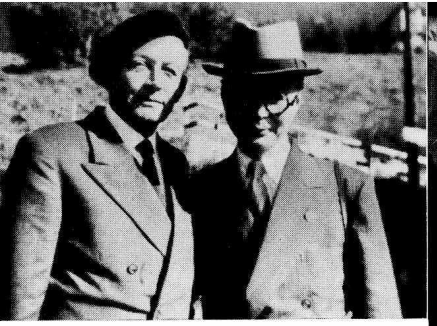
←大正十年　東京帝國大學三年の時　高等文官受驗勉强中　靜岡縣御殿場にて　右　菊池勇夫　左　光治良



→昭和二年　フランス留學中　ポア

←昭和十二、三年頃　「愛と死の書」執筆當時

→昭和五、六年頃　明治大學文學部での講演會の際　前列右から　岸田國士　片岡鐵兵　光治良



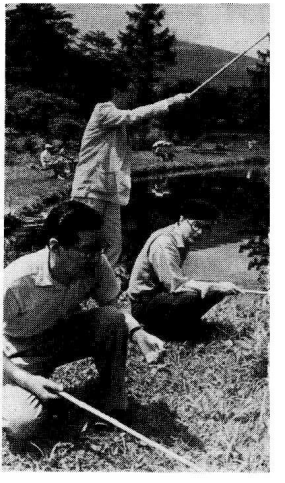
→昭和二十六年六月　羽田空港にて　スイス　ローザンヌの世界ペン倶樂部大會に日本代表として出發の際　右から　光治良　石川夫人　池島信平　久保田万太郎　石川達三

←昭和二十六年　スイス　レーザンにて　光治良が昭和二年　スイスで療養當時の主治醫　ヴオチェ博士と共

←昭和三十年頃　田村泰次郎宅にて　右から　田村泰次郎　光治良　アロン　小松清　ロゲンドルフ

→昭和二十八年三月　ペン倶樂部事務所前にて　ジュル・ロマン夫妻　その後　丸岡明　左　光治良

←昭和三十一年　北海道にて　講演旅行の際　右から　二人おいて　武者小路實篤夫妻　小林秀雄　光治良



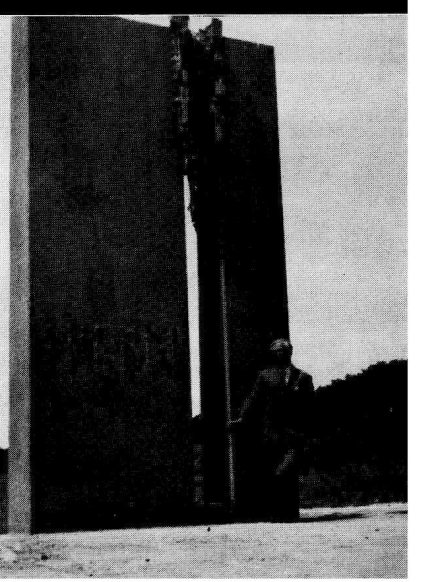
→昭和三十、三十一年頃　輕井澤にて　手前から　阿部知二　光治良　立野信之

→昭和三十二年九月　第二十九回世界ペン大會の際　京都　裏千家の茶室にて　右から一人おいて　今東光　川端康成　光治良　アンドレ・シャンソン夫妻

↑昭和三十四年七月　フランクフルトにてペン大會の際　フランスの女流作家　カタ

↑昭和三十五年頃　右から一人おいて　高見順　アシャール　松岡洋子　光治良

↑昭和三十七年夏　ソヴィエト作家同盟の招きにより旅行の際　右から　大岡昇平　リボーヴァ　光治良



→昭和三十八年三月十日　沼津市我入道の濱邊に建てられた文學碑除幕式の日に

←昭和四十年三月　光治良宅にて　老舎と

试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com 安全本请在线购买

豐島與志雄集　目次

卷頭寫眞

筆　蹟

野ざらし……七
人間繁榮……六三
道化役……七六
白い朝……九〇
秦の憂愁……一〇三
沼のほとり……一〇九
白　蛾……一二五
高尾ざんげ……一三三
どぶろく幻想……一三〇
作品解說……淺見　淵　四〇六
豐島與志雄入門……紅野敏郎　四一三
年　譜……四三一
參考文獻……四四四

岸田國士集　目次

卷頭寫眞

筆　蹟

古い玩具……一四一
チロルの秋……一六六
牛山ホテル……一七六
歳　月……二〇〇
速水女塾……二三四
女人渇仰……二六三

作品解說……淺見　淵　四〇六
岸田國士入門……紅野敏郎　四一三
年　譜……四二九
參考文獻……四四五

芹澤光治良集　目次

卷頭寫眞

筆蹟

愛と死の書……二七七
ブルジョア……二四七
橋の手前……二七三
戰災者……二八三
死者との對話……二九七

作品解說……淺見　淵　四〇六

芹澤光治良入門……紅野敏郎　四一三
年譜……四三八
參考文獻……四四六

豐島與志雄集

白蟻

―近代説話―

豐島與志雄

住居から谷一つ隔てた高台の向ふ横を走る省線電車の駅まで、徒歩で約二十分ばかりの距離を、三十分ほどもかけてゆつくりと、岸本省平は毎日歩きました。それは通勤の往復といふよりは、散歩に似てゐまして、道筋も

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com